

●東北

正木 裕美

2025年、東北においては仙台国際音楽コンクールの開催や多地域を結ぶ文化圏の形成など、一層と活気や広がりが見え立ってきた。音楽家や文化事業の作り手の熱意が、地域の文化圏に限らず、他地域からの来演や交流を盛んにしている。

国内外から多くの演奏家や未来の担い手が来仙した仙台国際音楽コンクールは、5月24日から6月29日まで日立システムズホール仙台で開催された。先行するヴァイオリン(vn)部門では出場申込者193名より37名が予選に進み、最高位は第2位のムン・ボハ(韓国・19歳)が受賞。第3位のジャン・アオジュ(中国・17歳)ほか、6位までの入賞者全員が韓国・中国出身者となり、アジア勢の充実ぶりが顕著に表れた。また「協奏曲コンクール」の異名のとおり予選以降はオーケストラとの協演力が試されるが、今回、同部門では全ラウンドでモーツァルトが課されたことを特筆しておきたい。審査委員長は堀米ゆず子が続投し、堀正文、ボリス・ベルキン、寺神戸亮ら計11名の演奏家が審査を担った。

ピアノ(p)部門へは445名の応募があり、会場における予選へは32名が出場。野平一郎審査委員長の「(予備審査は)前回以上に技術的に高い水準」との言葉どおり熱演が続き、入賞者は第1位=エリザヴェータ・ウクラインスカヤ(ロシア・28歳)、第2位=アレクサンドル・クリュチコ(同・24歳)、第3位=天野薫(日本・11歳)ほか、ヨーロッパと日本勢が占めた。3位までの受賞者はいずれも自国の作品でファイナルに挑んだが、天野による矢代秋雄のピアノ協奏曲は小学生ながら高いレベルに達し、最年少での受賞となった。なお、審査委員は野平以下、海老彰子、ジャック・ルヴィエ、ダン・タイ・ソンら計11名。vn部門では広上淳一が、p部門では高関健が指揮を務め、仙台フィルハーモニー管弦楽団と山形交響楽団(vn部門予選)がコンテストに寄り添った。

その仙台フィルは、コンクール直前に東京公演を行い(5/21 サントリーホール=広上淳一指揮)、マーラーの交響曲第1番ほかでオーケストラの「今」を紡いだ。定期演奏会は、常任指揮者の高関健と太田弦ら同フィル指揮者陣が、ホルスト「惑星」(1月 日立システムズホール仙台)、スメタナ「我が祖国」(2月)、芥川也寸志:交響曲第1番ほか(4、9月)、そしてショスタコーヴィチ:同第15番(5月)等、記念イヤーの作曲家を軸に展開。時節に適ったプログラム

で、作品やオーケストラの慣習を洗いなおすような音楽作りが透徹していた。また、アンドレアス・オッテンザマーによるR・シュトラウス(7月)、ユベール・スダーンを招いたモーツァルト&シューベルト(11月)では指揮者の持ち味が豊かに香り、名手・金川真弓の圧倒的的技巧によるバルトークのヴァイオリン協奏曲第2番(9月)、ベルリン・フィル・デビューを飾った山田和樹のストラヴィンスキー3大バレエ「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」(特別演奏会 11/15 東京エレクトロンホール宮城)等、海外(在住)アーティストらの来演も、高水準の演奏に繋がった。24年に始動した水曜昼下がりシリーズ「名曲トラベル」も引き続き好調。ベテランの首席奏者陣に加え、西口真央(fg)や紺野駿人(tb)、浦田誠真(tp)ら若い首席奏者陣の活躍も、オーケストラに良い刺激をもたらしている。

一方、山響は7年目を迎えた常任指揮者・阪哲朗のもとオペラや声楽曲で存在感を示し、ミュージック・パートナーのラデク・バボラークやオッコ・カムとの良質な音楽が話題を呼んでいる。この1年で阪が手掛けたオペラ・声楽曲は米沢公演における佐藤敏直の交響讃歌「やまがた」抜粋(1/13 伝国の杜置賜文化ホール)、演奏会形式によるブッチェーニ「トスカ」(特別演奏会 2/2 やまぎん県民ホール)、メンデルスゾーン「夏の夜の夢」(4月定期 山形テルサ)、そして佐藤真「大地讃頌」(5/18 村山市民会館)の4公演。とりわけ「トスカ」では音楽の細部に寄り添うような阪の構築に演技巧者の森谷真理(トスカ)、宮里直樹(カヴァラドッシ)らの歌唱が映え、オーケストラもまた、機微良く応えた。また2018年、24年の共演を経て関係性を深めるカムとは、十八番のシベリウスに取り組んだ。6月定期における「レンミンカイネン」、東京や大阪公演におけるオール・シベリウス・プロ(6/19 東京オペラシティコンサートホール、6/20 ザ・シンフォニーホール)と、同響のシベリウス音楽における伝統に白眉ならでの解釈を刻み込んでいる。またバボラークは自身のアンサンブルを率いて、モーツァルトのホルン交響曲第1番やハイドンによる2つのホルンのための協奏曲を披露(11月定期)。豊麗なホルンの響きとともに、表情に富む音楽を作り上げた。

山響は山形市外にも着実に文化圏を広げ、前述の米沢(別途8/23にも開催=キンボー・イシイ)や村山公演のほか、酒田、鶴岡における庄内定期演奏会(3/1 酒田市民会館希

望ホール=広上淳一, 7/21 荘銀タクト鶴岡=ユベール・スダーン), そしてオーケストラ・キャラバンを機に秋田県の横手市民会館でも公演を実施(12/27=坂入健司郎)。山形を象徴する文化交流の仲介役, 社会装置としての自負を持ち, 地域に貢献している。

音楽祭もまた人流を生み出し, 交流を盛んにしている。25年は延べ3万1,960名が来場した東北最大規模の仙台クラシックフェスティバル(10/3~5 仙台市内各会場)ほか, 小山実稚恵が主宰する「こどもの夢ひろば ポレロ」(8/2・3 日立システムズホール仙台), 「八戸イカール国際音楽祭」(8/14~19 SG GROUPホールはちのへ, ほか)等が開催された。また青森県出身の沖澤のどかを芸術監督に, 「青い海と森の音楽祭」が新たな一歩を踏み出した(6/30~7/6)。隠岐彩夏(S)や横山幸雄(p)ほか中核メンバーも充実し, とりわけこのために結成されたアオモリ・フェスティバル・オーケストラは, コンサートマスターの矢部達哉以下, 小川響子(vn), 北田千尋(vn), 鈴木康浩(va), 佐藤晴真(vc), 西沢澄博(ob), 山川永太郎(tp)ほか腕利きの気鋭やプロ・オケの首席陣が居並ぶ。「故郷青森に素晴らしい音楽をもっと届けたい」との沖澤の想いが結実し, 充実のスタートを切った。

最後に室内楽やアンサンブル, ソロ公演を駆け足で振り返りたい。山形では山響メンバーらが山形県郷土館文翔館, 日本基督教団山形六日町教会や囃館(はなしごや)といった歴史的建造物や聴き手と密に音楽を共有できる文化拠点において, ソロや室内楽公演を展開した。また仙台では仙台フィルの吉岡知広(vc)が主宰する「イズミノオト」や, 三宅進(vc), 西沢澄博(ob), 助川龍(cb)らが監修やプランニングを務める「Music from PaToNa」が好評を博している。パトナのシリーズは仙台フィルのメンバーに加え来演するアーティストの幅も一段と広がりを見せ, また学生を対象にアンサンブルのアカデミーを無料で開催&公開し, 若手への支援も継続中。弾き(吹き)手との交流が, 音楽界の裾野を広げる一助となっている。

なお, 山響創立名誉指揮者の村川千秋が鬼籍に入った。1972年に同響を設立する以前から最後のステージとなった村山公演(5/18)まで, 当地の音楽文化に寄与し続けた村川を偲び, 山響は追悼コンサート(11/9 山形市民会館)を聞いた。その功績への深い敬意とともに, 哀悼の意を捧げたい。

正木裕美(まさき・ひろみ)

クラシック音楽専門誌「音楽の友」編集部を経て, 現在, 毎日クラシックナビ編集/音楽ジャーナリスト。芸術文化振興基金運営委員会舞台芸術等部会委員, 音楽専門委員, 文化芸術活動調査員, 仙台市青年文化センター事業評価等歴任。